

コミュニケーション

Contents

- P2 こんにちは！あかちゃん
- P3 移動動物の紹介、訃報、飼育動物数
- P4・5 **特集1** 変わり続ける大森山動物園 & 公園
- P6・7 **特集2** 人工哺育の取り組み
- P8・9 飼育レポート
- P9 動物病院から
- P10・11 イベントレポート、今後のイベント
- P12 飼育日誌、お客さまの声、かたばた通信

No.84

2012.10月号

【表紙写真】

アミメキリンのリンリン(左)とカンタ(右)。6月にカンタが仲間入りし、大森山動物園のキリンが2頭になりました。2頭仲良くお食事中。





こんにちは! あかちゃん



アカコンゴウインコ

1月上旬、巣箱の中に卵を確認して見守っていましたが、23日目で抱卵しなくなったため、孵卵器に入れて孵化を試み、2/8に無事孵化しました。大型インコの人工孵化、育雛は当園では初めてのことでしたが、職員の懸命な努力でヒナが育ち、5月末に園内デビューを果たしました。

ツキノワグマ



2/9、冬ごもり中のルビーが子どもを出産しました。冬ごもりの姿を公開しようと寝室内にカメラを仕掛けていたので、雪の動物園期間中お客さまに子育ての様子もご覧いただきました。順調に育ったメスの仔はルイと名付けられ、5月にはルビーと一緒に展示場に出るようになりました。

ワオキツネザル



3/26と4/12に別々のメスが出産しました。年々家族が増えるワオキツネザル、今年も2頭が加わり、全部で23頭になりました。

フンボルトペンギン



3月上旬から4月の末までに、展示場の巣穴や孵卵器で合計7羽が孵化しました。その後1羽が死亡しましたが、2羽が自然育雛、4羽が人工育雛で育っています。人工育雛の個体は時折園内を散歩させています。

ニホンコウノトリ



昨年より1ヶ月ほど早く営巣、産卵が始まり、4月上旬に2羽が孵化して7月に巣立ちました。昨年の繁殖経験が生きたのか、子育てなどの親鳥の行動にもとことく余裕が感じられました。

コモンマーモセット



4/7、ももが双仔を出産しました。ももは昨年11/5にメスのこもも(写真右)を出産したばかりです。こももは生れてわずか5ヶ月でお姉さんになってしまいました。

タンチョウ



4月上旬から営巣、抱卵していた巣で、5/22に1羽のヒナが孵化しました。昨年は無精卵で孵化しなかったため、2年ぶりの繁殖成功になります。

この他、**ニホンリス、ホンドザル、ヤマアラシ2種、マーコール、シバヤギ、ホオアカトキ**などに赤ちゃんが生まれました。

移動動物の紹介

仲間入りした動物たち

アライグマ



3/13、展示個体の更新のために、弘前市弥生いこい広場から若い2頭のオスを導入しました。来園当初は小屋の中から出ようとしませんでした。最近ではまんまタイムの主演の座にも慣れてきたようです。

この他、**ジャンボウサギ、ハリスホーク**などが仲間入りしています。

シンリンオオカミ



6/7、群馬サファリワールドからカナダ生まれのメス、ジュディー6才が来園しました。白くて細身の美しいオオカミです。7才のオス、シンと良いカップルになることを願っています。

アミメキリン



6/14、長野市茶臼山動物園から、2才のオス、カンタがやってきました。今はまだ7才のメス、リンリンより一回りほど小さいのですが、早く大きくなって家族を増やしてほしいものです。

よろしくね!



大森山を後にした動物たち

アムールトラ



6/19、メスのアサコ1才を希少動物の繁殖のためにアドベンチャーワールドに貸し出しました。

アフリカタテガミヤマアラシ



3/7、昨年9月生まれメス、チャーハンを長野市茶臼山動物園に搬出しました。

この他、**シンリンオオカミ、コクチョウ**が他の動物園に移動しています。

元気でね!



イヌワシの有精卵移動



移動前の2卵

4/2、当園のイヌワシの有精卵2個を盛岡市動物公園に移動しました。これは希少種の保存のために、国内初となる有精卵の長距離移動と、繁殖未経験のペアに経験を積ませるなどの目的で行ったものです。卵は盛岡市動物公園のペアによって無事2羽のヒナにかえりました。人工育雛で育てられたヒナは7月末に亡くなりましたが、自然育雛のヒナは順調に育っているようです。

飼育動物数 (平成24年6月末現在)

類	種数	点数
哺乳類	52種	326点
鳥類	43種	190点
は虫類	11種	46点
両生類	1種	2点
魚類	4種	42点
無脊椎動物	1種	6点
計	112種	612点

訃報

忘れないよ...



シンリンオオカミ

♀ミッドナイト15才
4/6、オスのミッドナイト15才が亡くなりました。直接の死因は腎不全とみられますが、全体に老化が進んでいたようです。16年近くも頑張ってくれた功労者です。

この他、**ミーアキャット、ワシミミズク、シロフクロウ、マーコール**などが天に召されました。それぞれ、お客さまの注目を浴びた人気者でした。冥福を祈ります。



アライグマ

♀リン12才
5/8、高齢による衰えから「森のびょういん」へ入院していたメスのリン12才が亡くなりました。まんまタイムでは、担当者の指示通りに動いてくれる名優でした。



レッサーパンダ

6/28、展示場で産み落とされ、母親が面倒をみなかったことから、この種では当園初となる人工哺育となりました。その後生育は順調と思っていたのですが、残念ながら7/9朝に死亡していました。

変わり続ける大森山 動物園&公園



今、大森山動物園は、公園と一緒に、秋田の元気印の一つになろうと、そして、お客さまに何かを感じてもらい幸せ気分浸っていただきたいと、スタッフの熱い思いとアイデアで動いています。将来に向けた大森山動物園、公園の大筋の道標は、3年前に市民と一緒に作り上げた大森山自然動物公園構想ですが、それだけではなく、私たちは常に、お客さまと対話し、今何が必要なかを考えながら活動をしています。今回は各担当からそんな思いを綴ってもらいました。



もっと近くで もっと感じて より大きな感動を提供するために

飼育展示担当 主席主査 宇佐美 均

動物園は「動物と語らう森」をテーマに掲げ、飼育スタッフ皆、新しい工夫により、動物の展示やお客さまへのサービスを展開しています。動物たちの日々変化する魅力をより多くの方にご覧いただきたいの思いからです。

今年のテーマは「もっと近くで、もっと感じて」、主役である動物たちとお客さまとの距離を縮め、手の届くところにいる動物の毛並みや息づかい、臭いや仕草など生きている動物本来の魅力と迫力を体感していただこうとの思いです。

7月にはアムールトラとフラミンゴの観覧場所が新設され、ガラス越しにトラの様子がよりクリアに、また、綺麗なフラミンゴを目の前でご覧になることができるようになりました。

また、現在設計が進められているリス舎やカメ牧場（仮称）も今年中に完成する予定です。

子どもが生まれ、繁殖が順調なリス舎には、お客さまが中に自由にお入りいただき、リスと同じ空間を体感し、時に触れ合ったり目の前を横切る様子を観察できるようになります。また、仔ガメがたくさん誕生したケヅメリクガメのカメ牧場計画が進められ、放牧場のように開けた場所に、大きな大人ガメや小さな仔ガメを十数匹展示し、甲板に触れたり、また、寒い季節もカメをご覧いただけるようにしたいと改良計画を進めています。

動物園では、こうした展示サービスを「にぎわい創出事業」として位置づけ、継続的に進められるよ



新スポットになって見やすくなった「まんまタイム」

うに予算の確保に努めています。職員がアイデアを出し合い、園内で幾度も検討し実現させます。

更には、「自然と調和し、市民と共に成長し続ける公園づくり」をコンセプトとして進められている、動物園を核とした大森山自然動物公園（仮称）の整備では、2014年の完成を目指し、現在の正面ゲートを改修する大屋根ビジターセンター計画が進行中です。ここでは、入園してすぐお客さまに楽しんでいただくため、可愛い動物たちが出迎えてくれる、「ウエルカム動物」のコーナーを組み込みます。

動物園はある意味生き物と同じ、人がからだをケアし続けるように、いつも動物たちが元気で生き生きした表情でいられるように、またスタッフがハートのこもったサービスができるように、常にお客さまと対話し続け、園の改良を重ね、大きな感動を提供し続けていきたいと考えています。



美短との連携 ～美しく彩られる動物園～

企画広報担当 主査 八柳 泰輔

動物園内には、皆さんが大好きな動物たち以外にも、子どもたちや来園されたご家族の素敵な笑顔を創り出すアイテムが潜んでいます。ミルヴェ館内に飾られている動物立体ポスター、軽食コーナー前にある動物たちが描かれ園内を華やかに彩っている大きなパネル、子どもたちに大人気の「ふれあいランド」には、約10m×50cmもの大きなイラスト幕、園路に描かれたペンギンの足形などです。これらは、来園者に、特別な空間に居ることを無意識に伝え、期待感やワクワク感を与えています。

前段で紹介したものは、すべて秋田公立美術工芸短期大学産業デザイン学科（以下「美短」といいます。）の学生たちが提案してくれた作品です。

美短と当園は、アート&ハートプロジェクトと称して、大森山動物園を大きなテーマとした地域対応演習を共同で行っています。毎年、テーマを定めて、約15週間の時間をかけて行われ、イメージを膨らませるために学生たちが動物園に通ってきたり、園長が大学で講演を行ったりと、動物園と美短の間には良い関係が築かれています。

担当のベ・ジンソク准教授は、この演習の目的を「今後、中長期的に整備される大森山自然動物公園の魅力のかつ効果的なデザイン戦略の考え方やデザインの良い感性と論理の融合、企画の大切さ、情報の整理と見せ方について学ぶ。」としています。確かに、こ



設置完了後の作品（一部）



優秀作品に選出されたグループ

れから更なる発展をしようとしている大森山動物園をテーマとした授業を行うことは、学生にとって得るものが多いのではないのでしょうか。

そのような中で、平成23年度は、「秋田市大森山動物園アートストリートプロジェクト」と名付けられた授業が行われました。これは、大森山動物園へのアクセス道路をアートで飾り盛り上げようとしたものです。成果は「動物園にぎわい創出事業」で大森山動物園へのアクセス道路である市道大森山2号3号線沿いに掲示されました。3m×1mの15枚のパネルとなり、約1kmの動物園道路を彩り、動物園のウエルカムロードという新名所が誕生しました。

ご来園された方々は、アート感覚あふれる作品で彩られたストリートを通ってご来園、ご帰宅されたことが、楽しかった思い出の一つとして記憶に刻まれるのではないのでしょうか。



動物園とつながる公園

施設担当 主席主査 鈴木 悟

大森山公園は秋田市南西部に位置する約70haの都市公園で、45年から52年度にかけ整備されました。

自然の中で育む学校教育活動を目的に建設された、少年の家やフィールドアスレチックなどは、近年、老朽化が進み、加えて趣味の多様化により、大森山公園の利用が少なくなってきた感じを受けます。

そんな中でも、標高123.5mの展望台から見渡す鳥海山や男鹿半島の眺望、日本海に沈む夕日や、秋田市街地の夜景は、今も変わらず人々の心に思い出を刻み続けています。また、山頂下に広がるグリーン広場から塩曳潟につながる沢は、高木に挟まれた湿原植生域や、彫刻作品が並んでおり、心地よい環境と景観を備えています。散策路には、随所にサクラ、ツツジ、アジサイなど、四季折々の花が咲き、一年を通して彩り豊かな表情に出会い、植物の生命力など、自然を全身で体感できる恵まれた環境を持っています。



グリーン広場から塩曳潟へ続く湿原と彫刻



西側に見る日本海と男鹿半島

平成23年度からは公園の再整備がスタートしており、こうした整備に加えて独自のソフト事業を絡ませながら、この花は何、この道はどこに続いているのかなど、来園者の探求心をくすぐりながら、ハーブガーデニングなどを市民と一緒に作りあげるほか、散策路に動物の愛称を付けるなど、世代を超えた多くの人々が笑顔で利用し、次世代に残していける魅力が継続する公園にしていきたいものです。

人工哺育の取り組み



動物園では、毎年多くの動物が生まれてきます。ほとんどの場合、生みの親が子育てを行っていますが、事情によって、人が親代わりとなり、子育てを行うことがあります。これを人工哺育(鳥の場合は育雛)といいます。人工哺育を行うケースは、人工孵化させたり、親が出産後死亡してしまったり、育てることをやめてしまった場合等が主なものです。

今回、3種類の動物で、人工哺育(育雛)を行ったので、それぞれについて紹介します。



アカコンゴウインコの人工孵化、育雛

飼育展示担当 奥山 麻裕子

大森山動物園の「インコ・カワセミ舎」では、現在ワライカワセミと3種類のコンゴウインコを飼育しています。今年に入り、アカコンゴウインコのペアが産卵しました。このアカコンゴウインコは、南米の熱帯雨林に生息し、成鳥になると体重が800gを越える大型のインコです。色鮮やかな羽が特徴です。2012年1月6日、展示場にある巣箱の中で産卵を確認しましたが、孵化前の1月28日に親鳥が抱卵を放棄したため、卵を巣箱から回収し、人工孵化、育雛を試みました。回収した卵は2つでしたが、1つは巣箱から回収した時点で、卵の中で既に発育が停止している状態で、今回無事に孵化できたのは1羽でした。

アカコンゴウインコの孵化直後のヒナは、目は開いておらず、目が開くのは孵化して1ヶ月経つ頃になります。また、



孵化した当日の「メレブ」
孵化時の体重は19g



孵化後43日齢
目が開きました



孵化後60日齢
羽が生え始めてきました



孵化後147日齢
体重は600gを越えました

コンゴウインコの特徴である色鮮やかな羽も、孵化してすぐに生えてくるわけではなく、孵化後2ヶ月を過ぎて少しずつ生え始めてきました。

インコのヒナは通常、孵化後120日ほどたつまで母鳥から口移しでごはんを貰います。「メレブ」と名付けた今回誕生したヒナも、孵化後114日目までは人間が毎回手差しで給餌を行いました。子犬用キッドミルクやコンゴウインコ用粉ミルクなどをヒナの成長に合わせて、最初は水っぽいエサから段々と固形状のものに切り替えていきました。今では成鳥と同じエサを、お皿から自分で食べることができるようになりました。

まだ小柄ながら羽も綺麗に生え揃い、園内での散歩を行っています。お散歩時は「メレブ」と一緒に、来園者の皆さまへ大型インコの解説も行っています。この綺麗で迫力のある姿を近くで見ても触れていただき、インコの魅力をもっとたくさんの方々に知っていただけたらと思います。



フンボルトペンギンの人工育雛について

飼育展示担当 風登 百愛

フンボルトペンギンはワシントン条約の付属書Iで「絶滅の恐れのある種」に指定されています。しかし、日本国内では動物園、水族館で一番よく見られるペンギンです。

ここ大森山動物園でも順調に繁殖しています。しかし、決まったペアばかりの繁殖が目立ち、群れの中で弱いペアの繁殖がなかなかうまくいかないのが現状でした。

小さいときから人が近くにいることで将来的に人との接近がストレスにならず、お客さまにもより近くで観察してもらいペンギンに対する興味をより持ってもらえたらという思いもあり、今回は群れの中で血統的にも数が少ないペアのヒナを人の手に解して育てることにしました。

今回の人工育雛においては、将来的に繁殖に影響がでないよう人工育雛による人慣れを回避するために、2羽以上で育雛することにしました。

2012年4月16,17,18,30日孵化の4羽を人工育雛とし

ました。孵化直後の体重は平均すると74g程で片手に乗るくらいの大きさです。餌は1日4~5回に分けて給餌しました。

生後70日を越えた頃から園内を散歩したりしお客さまとも触れ合ったりもしてきました。人が近くにいるにも特にストレスを感じたりはしないので、これから、いろいろな機会により近くでペンギンを観察してもらう場を設けていけたらと思っています。そうすることで野生のペンギンの現状にも興味を持ってもらえたらと思っています。



生後2日目



生後100日目



レッサーパンダの人工哺育

飼育展示担当 堀籠 麻子

大森山動物園では3頭のレッサーパンダを飼育しています。全国の動物園で見られ人気の高いシセンレッサーパンダですが、野生ではジャイアントパンダと同じく絶滅の危機にある動物です。世界で飼育されているレッサーパンダの半数は日本で飼育され安定して繁殖していますが、当園では2005年に繁殖して以来途絶えていました。

そんな中2012年6月28日にオスのユウタとメスの陸との間に2頭の仔が生まれました。ただ開園中の室内展示場という馴れない場所で出産してしまったメス親は落ち着かず、仔の胎膜をとってやることもせず、世話をしようとする行動が見られませんでした。すなわち育児放棄です。

そのためやむなくメス親から仔を離し、人工哺育に切り替えました。当園でのレッサーパンダの人工哺育は初めてで、他の動物に比べかなり難しいレッサーパンダの人工

哺育成功率は5割を大きく下回るほどです。他園の資料などを参考に獣医師とチームを組み、交代で午前6時から午前0時の間で1日6回の哺乳(パンダミルク)などをし、体重は1日10gずつ増え順調に育っていたのですが、7月9日の早朝、午前6時前に保育器の中で仰向けに死亡しているのが確認されました。10日齢でした。

原因は肺の循環不全といって血液が体をうまく巡れなくなったのではないかと見解でした。

レッサーパンダの繁殖は年に1回であるため、来年以降自然哺育で無事に成長していけるよう、個体の安心できる環境作りとより高い技術を身につけていきたいと考えています。



この他にも、これまでに大森山動物園では、サル等の哺乳類、イヌワシ等の鳥類でも人工育雛を行ってきました。親が育てなくなった希少野生動物を確実に成長させるためには、人工哺育はなくてはならない方法です。

ただ、人慣れが過ぎると、同種の他の個体との関係に影響を及ぼしてしまいます。特に、群れで生活する動物は、群れに戻ることがとても難しいのです。例えば、チンパンジーのJ(ジェイ)太郎は、母親の乳の出が悪かったため、人工哺育で育ちましたが、群れ入りがなかなかできず、現在、伊豆シャボテン公園で修行の日々を送っています。また、人工哺育で育った個体がうまく繁殖に取り組みなかつたり、子どもを出産したものの、再び育児放棄を繰り返してしまうケースもあります。

一方、当園にて人工哺育で育ったチンパンジーのコブヘイが、横浜市立野毛山動物園で無事に父親になっている例もあります。

一人前に育つまでの苦勞、育った後の苦勞もありますが、やはり、無事に育って、種の保存に貢献できるよう、動物園の飼育員は全力を尽くしています。



飼育レポート

飼育レポート①



キリンの輸送から同居まで

飼育展示担当 柴田 典弘

2012年6月14日長野市茶臼山動物園から「カンタ(オス2歳)」が仲間入りしました。カンタの受入れに備え、事前準備として先ず取り組んだのは「リンリン(メス7歳)」を普段とは別の寝室に収容する訓練でした。約1年間単独飼育だったこともあり、おのずとリンリンの寝室は決まっていたのですが、カンタがどの寝室を好むかわからないため、年上のリンリンを別の部屋に慣らす必要があったのです。これを約1週間実施し、

どの寝室(計3室)に入っても普段と変わらない行動を見せるようになりました。あとはカンタが無事に搬入されるのを待つばかりです。

朝7時頃トラックに乗ったカンタが到着しました。搬入作業は順調に進み10時頃には無事収容できましたが、その日は終始緊張した様子で餌を食べる余裕もなく、飼育員としてカンタにとって最も落ち着く状態を選択することが求められました。室内では別の寝室に収容したリンリンの方をじっと見つめていたことから、翌日早速カンタを外へ出し、柵越しでの見合いを実施しました。2頭は、まるで今までずっと一緒だったかのような落ち着いた様子を見せました。餌を口にできなかったカンタも、リンリンが近くにいる間のみ木の葉を食べたことから、早い段階での同居が理想的であることを確信し、3日目の6月16日の朝、メイン展示場での同居をスタートさせました。直後からお互いが首を摺り寄せ同居を心待ちにしていた様子で、ようやく職員も安堵感に包まれました。

当園はキリンにおいて、健康管理のためのトレーニングを実施していますが、カンタも6月下旬から開始しています。削蹄を想定した「前肢出し」を7月中旬にはマスターするなど、とても賢いキリンで、リンリンとの相性も良く、2世誕生に向けて大切に飼育しています

飼育レポート③



大家族のワオキツネザル

飼育展示担当 松井 健

大森山動物園の東側、チンパンジー舎隣に「サル舎」があります。

ここで飼育しているワオキツネザルは現在23頭の大家族。頭数が多く全頭を一緒にして管理することができないため、

今は3つの群れ、3つの部屋に分けて飼育しています。一つは4頭(オス1メス3)の群れ、もう一つは8頭(オス5メス2不1)の群れ、そして9頭(オス7メス1不1)の群れです。2頭(オス1メス1)は病気療養のため入院中です。

なぜ全頭一緒に、同じ部屋で飼うことができないのか?その理由として、飼育する部屋が狭く、全頭が入る大きな部屋が無いこと。個体同士に相性があり、特に繁殖期にはメスをめぐって激しい闘争がおこり、怪我等が心配されるからです。

また、もう一つ重要なこととして、血統管理が挙げられます。実は23頭のほとんどが血縁関係にあり、そのため、繁殖した個体に生まれついて病気があったり、体に障害があったりなど健康な子どもが育たない心配があります。

この現状を少しでも改善し、サルたちが過ごしやすい環境となるよう、今後は、隣り合わせの部屋に、オス群、メス群、繁殖群と群れの分け方を見直したいと思っています。また、展示場もガラスや出窓などを利用して、23頭の大ひなたぼっこやワオキツネザルの特徴でもある大ジャンプ、迫力ある追いかけっこなどの元気な行動をすぐ目の前で見てもらえるようにできたらいいと思います。

飼育レポート②



アフリカタテガミヤマアラシの牛骨給餌

飼育展示担当 小嶋 夏海

野生でのアフリカタテガミヤマアラシは、ライオンやヒョウの食べ残した骨を自分の住み処に持ち帰り、かじってリン

酸カルシウムなどの栄養を摂取しているそうです。大森山動物園での牛骨給餌は、この文献を参考に2005年から始めました。

牛骨給餌を始めてから、これまでにどのような変化が見られたのかご紹介いたします。

当園では現在、6頭のアフリカタテガミヤマアラシを飼育しています。毎日の観察で特に気付く事は、毛並みがとても良くなったことです。牛骨をとてもよくかじる個体とあまりかじらない個体では、毛のつや光沢が明らかに違います。

次に、繁殖にも大きく関係しています。繁殖が難しいといわれているアフリカタテガミヤマアラシですが、お母さん個体(愛称:ワヤ)は、今回の出産も含め今までに10頭以上の子どもを出産し、育ててきました。詳しいことは不明ですが、牛骨給餌がワヤの子育てに大きく貢献しているのではないかと考えられます。

当園で牛骨給餌を始めてから約7年になります。ヤマアラシたちがガリガリと音を立てながら牛骨をかじる姿はとても迫力があり、時には半日もずっとかじっている事もあります。その様子をぜひ一度目の前でご覧いただければと思います。

動物病院から

ポニー「クリン」の闘病生活

獣医師 柴田 千秋

クリンは、19歳のオス(去勢済み)のポニーで、お尻を触られることが好きという変なところもありますが、気が優しく、愛嬌のある性格をしています。そんなクリンですが、年齢も高齢になってきたためか、昨年の秋頃より体調を崩し、呼吸の状態に異常が見られ、それに伴い体重も徐々に落ちてきました。病気の原因は可能な範囲で検査をしてみました。正確には分かりませんでした。これまでいろいろな治療を行ってきましたが、完全に治すことはできず、現在は症状を軽くするために、薬を食べさせたり、注射したり、点滴をしながら少しでもクリンの負担が減らせるように治療を行っています。飼育担当者も青草を刈り取ってきて食べさせたり、栄養をつけさせるような餌を用意したり、暑い日には少しでも過ごしやすいように、日陰や風の通るような場所を選んで休ませたり、様々な努力をしてくれています。クリンだけではなく、どの動物にも言えることですが、歳をとってくると体力も落ちてきますし、様々な病気にかかりやすく、治してあげることも難しい

場合が多いです。でも、これまで動物園に貢献してくれた恩返しとして、少しでも快適な余生を過ごせるように、私たちはできる限りのケアをしていきたいと思っています。



イベント レポート

猛暑の中の サマースクール

7月31日・8月1日

サマースクール担当 山上 昇

7月31日(火)、8月1日(水)の2日間開催された第38回サマースクールは、1日目16組34名、2日目12組30名の皆さんが参加されました。遠くは、沖縄県から参加した親子もいて、1日飼育係として汗にまみれ奮闘しました。

今年は、とにかく「暑い」の一言。連日の猛暑と熱帯夜で、開催前から熱中症の心配をしたほどでした。しかし、心配をよそに、参加者は午前の飼育体験、午後から各コースに分かれての企画に笑顔、笑顔の連続でした。

午前には、2日間とも9つの班に分かれ、2種類以上の動物の飼育体験に奮闘し、午後は、初・中級コースは2日間とも「ザリガニ釣り」とアライグマへの給餌と観察、上級コースは1日目の「キリンのトレーニングおよび採血風景の見学と血液を顕微鏡で観察」、2日目の「ポニーの治療風景の見学および病院内でのウサギの診療風景の見学」を体験しました。

子供たちに人気のある初・中級コースの「ザリガニ釣り」では、約20分の制限時間でザリガニとの釣るか釣られるかの真剣勝負を繰り広げました。場所が狭く、釣り糸が絡んだり、草にクリップが引っかかるなどのハプニングもあり思うように釣ることはできず、捕獲量は、1日目0匹、2日目



4匹と残念な結果になりましたが、皆制限時間ぎりぎりまで粘り強くザリガニとの真剣勝負を楽しんでいました。その後のアライグマへの給餌では、ザリガニに食らいつくアライグマに参加者は目を丸くしてじゅくりと見入っていました。

上級コース1日目のキリンの採血では、滅多に見ることのできない大型動物の採血風景を固唾をのんで見ていました。その後は、病院に場所を移して、動物の診療や採血した血液を顕微鏡で覗き込みながら獣医師の解説に耳を傾け、まるで大学の講義を受けているような感覚になったようでした。2日目には、体調を崩しているポニーの治療風景を目の当たりにした参加者は、獣医師と飼育職員の生死の狭間に立つ大変さを実感したようでした。

今年も参加希望が多く、厳正なる抽選の結果、参加した皆さんは、暑さにもめげず、飼育職員の指導をよく聞き、協力しながら、素晴らしい体験をしたようでした。担当として、皆さんの協力で何とか無事に今年のサマースクールを終えることができ、ほっとしていますが、後に出た多くの課題を整理して、来年もっと充実した企画でお待ちしています。皆さん、本当に猛暑の中お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。

春の動物ふれあい フェスティバル 6月3日

6月3日(日)に、大森山動物園人気イベントの1つである春の動物ふれあいフェスティバルを開催し、当日は天候にも恵まれ、たくさんの方が訪れました。

メインイベント「どうぶつパレード」では、今回初めて来園者も一緒にパレードへ参加していただきました。参加者は、それぞれジャンボウサギやオカメインコ、ポニーなどと一緒に行進し、コーンスネークを首に巻き付けて歩いた参加者もいました。秋田ノーザンハピネッツのキャラクター「ビッキー」も登場し、動物たちや大森山遊園地アニパ



の「エクル隊長」と一緒にパレードを盛り上げました。

また、新しいイベントとしてアシカの輪投げ体験も実施。参加者が投げた輪をアシカが華麗にキャッチする姿に大きな拍手が起こっていました。この他、ミルヴェンジャーのヒントタイムが好評の「ウォーククイズ」や「吹き矢体験」、「猛獣舎裏側探検とお食事見学」などのイベントも開催しました。

親と子のふれあい写生大会 7月28・29日

7月28日(土)、29日(日)の2日間にわたり、第35回親と子のふれあい写生大会が開催されました。2日間で557点のバラエティに富んだ作品が提出され、入賞54点、佳作25点、入選25作品が決定しました。

岩の上に立って周りを見下ろしている姿がこの場所の主であることをうまく表した、安居院 舜さんの「オレが！マーコールだ!!」、カピバラの毛なみの様子を色と線の使い方を工夫して描かれた、加賀谷 多規さんの「けがふさふさなカピバラ」、夏の暑い日に休んでい

る2頭のカンガルーを奥行きを感じさせる構図で描写した、泉千花穂さんの「くつろぎタイムのカンガルー」が今年の上位3賞に選ばれました。

受賞者には、8月26日に大森山動物園内森のステージにて行われた表彰式において、市長、市議会議長、秋田市教育長からそれぞれ賞状と副賞が贈呈されました。受賞された皆さん、おめでとうございます。



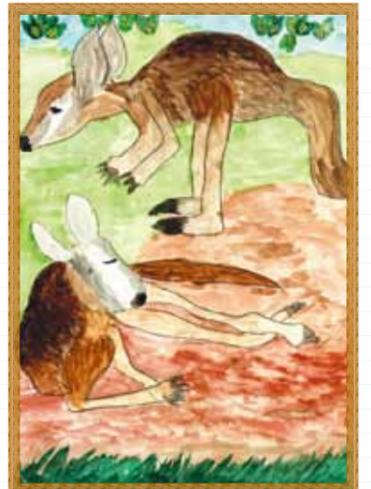
秋田市長賞

「オレが！マーコールだ!!」
秋田市立御所野小学校5年 安居院 舜さん



市議会議長賞

「けがふさふさなカピバラ」
秋田市立土崎小学校1年 加賀谷 多規さん



教育長賞

「くつろぎタイムのカンガルー」
秋田市立桜小学校4年 泉 千花穂さん

夜の動物園 8月14日~17日

毎年好評の「夜の動物園」。今年は8月14日(火)から17日(金)の4日間開催し、期間中はご家族やグループ、カップルなど県内外から多くの方にご来園いただきました。

今年は、これまで夜の動物園では屋内で展示をしていたゾウとキリンを屋外でご覧いただけるようにした他、マーコールの天空の食卓やペンギンの水中をライトアップしたり、園路を照らすキャンドルストリートを実施するなど、より夜の動物園を



お楽しみいただけるよう幻想的な空間を演出しました。

また、大人気のまんまタイムやどうぶつ解説も大勢の人で賑わい、どのイベントも開始時間には周りを埋め尽くすほどの人が集まって、動物たちの迫力ある姿や可愛い仕草に大きな歓声が上がりました。

今後の イベント

いい夫婦の日イベント 11月23日(金・祝日)

11月22日の「いい夫婦の日」にちなみ、ご夫婦だけで動物園をお楽しみいただく特別なイベントです。二人で、動物園を散策しながらゆっくりとした時間をお過ごしください。(イベントへの参加には事前応募が必要です。)



さよなら感謝祭 12月2日(日)

今年の通常開園最後の日となる12月2日に、動物の慰霊とお客さまへの感謝の気持ちを込めて、「さよなら感謝祭」を開催します。当日は、通常入園料大人700円のところ500円で入園できます。(他の割引との併用はできません。)



雪の動物園 2013年1月5日(土)から2月24日(日) (土日祝のみ)

毎年好評の「雪の動物園」は今シーズンも開催。真っ白な雪が太陽を反射し、普段とは違う一面銀世界の動物園と、その中で過ごす動物たちの表情をぜひご覧ください。



飼育日誌

2/6	カリフォルニアアシカ	検温、採血のトレーニングを行う。	6/18	アフリカゾウ	ダイスケ♂ 左牙先端が欠落。
2/7	シバヤギ	シロ♀朝から鳴いていたため、信濃丞と同居させる。	6/19	アムールトラ	アサコ♀ アドベンチャーワールドに搬出。
2/13	ツキノワグマ	入室し、仔の鳴き声を確認。1頭確認。	6/20	ホオアカトキ	ヒナの姿を確認。鳴きながら頭部を小刻みに動かす。
2/15	トナカイ	マオ・サクラとカイオウの展示場を入れ替える。	6/22	シバヤギ	ヤムチャ 朝、♀2頭の産産を確認。
2/22	イヌワシ	西目 第1卵を確認し、孵卵器へ入れる。	6/23	シンリンオオカミ	ジュディー♀を屋外展示場に出す。
2/28	アカコゴウインコ	ヒナ 首が右に曲がり、うまく握らない状態。	6/25	カナダヤマアラシ	匂いを嗅ぐ、人前に寄ってくるなど活発に動く。
2/29	コウノトリ	冬囲い撤去作業。巣台に卵4個を確認。	6/28	レッサーパンダ	メープルの仔(メイ)は、♀と判明。
3/5	ワビチ	♂ 展示場内を走り回り、キーパーにも攻撃的。	6/30	ポニー	陸♀が室内展示場で2頭出産。
3/8	ビューマ	午前中、展示場で同居。	7/1	シバヤギ	1頭は死亡、1頭は人工哺育。
3/9	ポリビアリスザル	フレイメン、爪研ぎ行動が多く見られる。	7/3	フンボルトペンギン	クリン 夕々に展示場で砂浴び。採食良好。
3/14	アナグマ	午前中、パパとすず交尾確認。	7/4	シバヤギ	ギン 朝、♂1♀1を出産。
3/16	アライグマ	冬ごもりから起こす。	7/6	アミメキリン	ヒナ7 6日齢 園内を散歩。誰にでもついていく。
3/17	ポニー	新規個体2頭を朝、展示場へ放飼する。	7/7	ノジロオマキザル	シロ 昼頃、♀2頭出産。
3/28	チンパンジー	通常開園スタート。	7/8	ホオアカトキ	カンタ♂のターゲットトレーニング開始。
4/2	イヌワシ	エニフとエルフィーが開園セレモニーに参加。	7/9	レッサーパンダ	手にタッチするトレーニングと棒を握る
4/6	シンリンオオカミ	飼育員がボンタ♂に指を噛み切られる事故が発生。	7/11	アカカアンガルー	トレーニングを行う。
4/7	ウサギ・モルモット	展示ペア抱卵の卵2個を盛岡市動物公園に譲渡。	7/12	キョン	ヒナ 羽ばたきを確認。
4/8	アムールトラ	ミッドナイト♂死亡(腎不全)。	7/12	ケヅメリクガメ	朝、6/28出生個体の死亡確認。
4/9	アミメキリン	移動動物園に参加。	7/12	アムールトラ	デニーロ♂とモモコ♀の交尾確認。
4/15	アメリカビーバー	移動動物園に参加。	7/14	アムールトラ	展示場フェンスの一部をガラス板に張り替え。
4/15	ホンドキツネ	兄弟トラ(ヒロシ♂、アサコ♀)の1歳誕生会。	7/16	チンパンジー	カメコ 17個産卵。
4/17	ホオアカトキ	パドック柵越で、屋外採血に初めて成功。	7/18	アカコゴウインコ	展示場金網の一部をガラス板に張り替え。
4/21	タンチョウ	今日から、見合い開始する。	7/20	ホンドタヌキ	展示場金網の一部をガラス板に張り替え。
4/25	ホンドフクロウ	2羽を新フクロウ舎に移動。	7/21	アフリカテガミヤマアラシ	ユミノスケ♂誕生会。
4/27	イヌワシ	3羽(信濃、たつこ、風輝)を改修した猛禽舎に移動。	6/8	ミニブタ	散歩時、地上2.5mほどまで飛翔する。
4/28	アフリカゾウ	有料えさやり体験を開始。	7/30	トナカイ	ボン♂とポコ♀の闘争あり。
5/2	マーコール	若♂2頭とロール♂♀群との同居開始。	8/1	フラミンゴ	ワヤの仔の性別は♂と判明。
5/2	ワオキツネザル	仔2頭 親から放れて遊ぶ時間が多くなった。	8/4	ポリビアリスザル	トレーニングにホイッスルを使い、呼び戻しを強化。
5/6	アカコゴウインコ	腕乗せ展示の練習開始。	8/5	チンパンジー	全頭、暑さのため呼吸が浅く速い。
5/7	ツキノワグマ	子グマが屋外展示場デビュー。	8/6	プレーリードッグ	展示場ガラス前、記念撮影客が増え、滞在時間も長い。
5/8	アライグマ	リン♀死亡。	8/6	シンリンオオカミ	わずか♀ 朝、出産していたが、仔は死亡していた。
5/10	ラマ	ヒロ♂ リードを着け、園内散歩トレーニング。	8/7		全頭、夏バテか採食不良。動きも緩慢。
5/13	チンパンジー	ココ♀ 誕生会。	8/9	ニホンリス	エール♂ 朝から動き鈍く、治療するも、夕方死亡。
5/13	プレーリードッグ	エル♂、モール♀、新♂の同居。闘争は見られない。	8/11	ワタボウシバンシェ	シン♂とジュディー♀の同居スタート。
5/15	マーコール	午後3時過ぎ、ララが2頭出産。	8/12	シバヤギ	連れ添って展示場内を動き回る。
5/22	タンチョウ	1卵孵化。もう1卵も嘴打ちが始まっていた。	8/14	カピバラ	出生個体6匹の体重測定、マイクロチップ埋め込み。
5/23	カナダヤマアラシ	メープル 展示場側的小屋内にて1頭出産。	8/15	アフリカテガミヤマアラシ	ランディー♂ ホシガメ展示場に移動し、混合展示を始める。
5/23	コウノトリ	ヒナ2羽 日中、立ち上がる時間が長くなってきた。	8/18	クジャク	メーメーオリピック表彰式。
5/26	フンボルトペンギン	ルー 岩山の下段あたりで1頭出産。	8/21	アミメキリン	第一位は、ライス(バナラの仔)。
5/28	ツキノワグマ	ヒナを外に連れ出し、来園者にタッチングしてもらう。	8/24	シロフクロウ	ぐり、ぐら 夜の動物園で初めての夜間展示。
6/5	シバヤギ	仔♀は「ルイ」と命名。マイクロチップ埋め込み。	8/25	アフリカゾウ	展示場に果実入り氷柱を設置。
6/7	シンリンオオカミ	バナラ 夕方、1頭♀出産。	8/25	マーコール	全個体、かじり食していた。
6/9	シバヤギ	キララ♀、群馬サファリパークに搬出。	8/30	アライグマ	7/22産卵の卵が人工孵化。
6/14	アミメキリン	ジュディー♀、群馬サファリパークから搬入。	8/31	ヒツジ	カンタ♂の本格的な追尾行動を確認。
6/16	アミメキリン	バナラ親子をなかよしタイムに参加させる。			ゴマ♀ 朝、死亡しているのを確認。
6/18	アカカアンガルー	茶臼山動物園から、♂(カンタ、2歳)を搬入。			2頭ともプールに入って水浴びしていた。
		リンリン♀とカンタ♂を同居展示。			ルー♀展示場中央部で死亡を確認(循環不全)。
		デニーロ♂とトマコ♀の交尾確認。			2頭でグルーミング行動。
					全頭の毛刈り終了。



お客様の声

- マーコールが展示場やぐらに登って食事している光景を見て、「この展示効果はすばらしい。」
- アシカのトレーニングを見て、「水族館に行かなくても見られるんだ。しかも近い。手を伸ばせば触れられそう。」
- ケヅメリクガメのまんまタイムを見て、「これだけでも来た甲斐があった。また、見に来たい。」
- アシカのトレーニング、「いろいろなことができるようになってすごいね。また遊びに来るね。」
- フラミンゴが、ガラス面になって前より見やすくなった。
- アライグマのまんまタイムが大好き。
- アシカのトレーニングを見て、「動物園なのにすごい。」
- キリンを近くで見られて感激した。
- シロフクロウ♀の死亡を聞き、「とてもショックです。」



実は、ほめられたら伸びるタイプです

かたばた通信

編集後記

コミュニケーションの作成で最初に行うことは、「この誌面で何を伝えたいか」を考えること。何について取り上げ、どう伝えるのかを考えます。

今回は、大森山全体と動物の人工哺育を特集として取り上げましたが、どんな記事を取り上げても、結局は一本につながっていることに気がきます。職員は、「お客さまに喜んでもらう」という目的に向かって、それぞれアイデアを出し、実現に向けて日々奮闘しています。そんな、動物園や職員の思いとそこに向けた取り組みを、多くの人に伝えることがこの誌面の役割なのだ実感します。

何も考えずに、ただ動物たちの姿を見るだけで楽しい。個人的にはそこが動物園の魅力の一つだと思っていますが、動物園の中では動物のここと、お客さまのこと、施設のことなど様々なドラマがあります。この誌面でそのドラマを知って動物園を訪れることで、また違った楽しみ方をしてもらえればうれしく思います。(保坂)